

— 1 —
次の文章は、哲学という学問について書かれた文章である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

哲学といえば、たいていのひとは、ソクラテスやプラトンからデカルト、カントをへて、ハイデガー、ウイットゲンシュタインにいたる西洋哲学史上の人物を思い浮かべるようだ。そして、哲学を学ぶとは、そういうひとたちの書いたものを読んで、理解することだと思っているひが多い。しかし、そういうやり方で、哲学の真髄しんすいに触れることは、絶対にできない。A、Aはそう確信している。

本人にとつてはどんなに興味深い、重大な意味をもつものであっても、他人の見た夢の話を書くことは、たいていの場合、退屈なものだ。それと同じように、他人の哲学を理解することは、B退屈な仕事である。そして、どんなによく理解できた

ところで、しよせんは何か 1 《な感じが残る。ほんとうのことを言ってしまったら、他人の哲学なんて、たいていの場合、つまらないのがあたりまえなのだ。おもしろいと思うひとは、有名な哲学者の中に、たまたま自分によく似たひとがいただけのことだ、と思ったほうがいい。いずれにしても、他人の哲学を研究し理解することは、哲学をするのとはぜんぜんちがう (a) シュルイの仕事である。

哲学というものは、最初の第一歩から、つまり哲学なんてぜんぜん知らないうちから、何のお手本もなしに、自分ひとりではじめるのでなければ、けつしてはじめることができないものなのだ。つまり、哲学の勉強をしたら、もうおそいのだ。① 勉強は哲学の大敵である。

そんなことをいっても、何の手だてもなしに、自分ひとり、2 《一貫で、哲学をはじめなんてことが、ほんとうにできるものなのだろうか？ と、こう思うひとも多いにちがいない。だが、できるのだ。よくが読者の方々に (b) デンジュしたいやりかたは、とてもかんたんなものだ。② 大人になるまえに抱き、大人になるにつれて忘れてしまいがちな疑問の数々を、つま

り子どものときに抱く素朴な疑問の数々を、自分自身がほんとうに納得がいくまで、けつして手放さないこと、これだけである。

子どもとは何だろう。そして、子どもが大人になるとは、どういうことだろう。思うに、それはこうだ。子どもは、まだこの世の中のことをよく知らない。それがどんな原理で成り立っているのか、まだよくわかっていない。では、大人はわかっているのだろうか。ある程度はそうだ。大人はわかっている。しかし、全面的にわかっているわけではない。むしろ、大人とは、世の中になれてしまつて、わかっていないということを忘れてしまつているひとたちのことだ、とも言えるだろう。

ソクラテス（ま）はかつて、こんなことを言った。世の識者（ま）たちは、自分がだいたいなことを知らないということに気づいていない。つまり、わかっていないということを忘れてしまつている。それに対して、自分は、知らないということを知っている。つまり、わかっていないということを忘れていない。この点で、世の識者たちよりも自分のほうがものがよくわかっている、と言えるだろう、と。

「知らないということを知っている」ことを「無知の知」という。知つていると思ひ込んでいるひとは、もう知ろうとしないだろうが、知らないとわかっているなら、なお知ろうとしつづけるだろう。知ることを求めつづけるこのありかたを「フィロソフィア」という。「フィロ」とは愛し求めることであり、「ソフィア」とは知ることである。つまり、「フィロソフィア」とは、知ることを愛し求めることを意味する。これが、哲学という言葉（英語ではフィロソフィ）の語源だ。

だとすれば、③ 子どもはだれでも哲学をしているはずである。子どもは、C、自分が知らないということを知っている。ただ、子どもはソクラテスとちがつて、たいていの場合、3 《、ということを知らない。そして、「大人になれば自然にわかる」とかなんとか教えられ、そう信じ込まされて、わかっていないということがわからない大人へと成長していくのだ。

大人だつて、対人関係とか、世の中の不公平さとか、さまざまな問題を感じてはいる。しかし大人は、世の中で生きていくというこの前提となつていようなことにについて、疑問をもたない。子どもの問いは、その前提そのものに向けられているのだ。世

界の存在や、自分の存在。世の中そのものの成り立ちやしくみ。過去や未来の存在。宇宙の果てや時間の始まり。善悪の真の意味。生きていることと死ぬこと。それに世の習いとしての倫理（たとえば、知っている人に会ったらあいさつするとか）の（c）フシギさ。などなど。こうしたすべてのことが、子どもにとっては問題である。

子どもは、ときに、こうした疑問のいくつかを、大人に向けて発するだろう。だが、たいていの場合、大人は答えてはくれない。答えてくれないのは、^④ 問いの意味そのものが、大人には理解できないからである。かりに答えてくれたとしても、その答えはまとはずれに決まっている。せいぜいよくて、世の中で通用しているたてまえを教えてくれるか、何だか知らないがそうになっているのだよ、と（d）ソツチョコクに無知を告白してくれるか、そんなところだろう。子どもは、問うてみても無駄な問いがあることをさることになる。

つまり、大人になるとは、ある種の問いが問いでなくなることなのである。だから、それを問い続けるひとは、大人になってもまだ〈子ども〉だ。そして、その意味で〈子ども〉であるということは、そのまま、哲学をしている、ということなのである。

（永井均『〈子ども〉のための哲学』〈講談社〉による）

（注1）ソクラテス……ギリシャの哲学者。哲学の祖といわれる。

（注2）識者……物事について確かな判断や理解ができる人。

問一 (a) (d) のカタカナを漢字に直しなさい。（ていねいに書くこと）

問二

A

C

 にあてはまる語として、最も適当なものを選びなさい。ただし、同じものを二度使わないこと。

ア しばしば イ とても ウ ときおり エ 少なくとも

オ たしかに カ 相変わらず キ あえて

問三 《 1 》にあてはまるひらがな五字の語を、本文から書き抜きなさい。

問四 《 2 》にあてはまるひらがな三字の語を答えなさい。

問五 — ①「勉強は哲学の大敵である」とあるが、それはどうしてか。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

- ア 知識をためこんでそれを理解することばかりに気をとられてしまい、時間が無くなってしまうから。
- イ 人の考えをよく知り学ぶことで、かえってそれにしづまれ、素朴で自由な疑問を持てなくなるから。
- ウ 他人の考えをよく整理して、自分の考えと照らし合わせることは、そもそも無意味な作業だから。
- エ すぐれた哲学者はみな、他の哲学を学ぶことで、新しい考えを生み出すことができたから。

問六 — ②「大人になるまえに抱き、大人になるにつれて忘れてしまいがちな疑問の数々」について、最も具体的に書いてあるところの、はじめの五字を書き抜きなさい。

問七 — ③「子どもはだれでも哲学をしているはずである」とあるが、ここでは子どものどのようなところを「哲学をしている」と言っているのか。三十五字以内で説明しなさい。

問八 《 3 》にあてはまるものとして、最も適当なものを選びなさい。

ア 大人たちもほんとうはわかっていないのに、それを知られたくないので、わかっているふりをしているだけだ
イ 大人たちもほんとうはわかっていないので、子どもよりわかっているふりをむりやりしつつ、わかっていないふりをする
ウ 大人たちもほんとうにわかっていないから、わかるということがどういうことかをなんとかしてかんがえようとしている
エ 大人たちもほんとうはわかっていないのに、わかっているふりをするということがわからなくなってしまっているだけだ

問九 — ④「問いの意味そのものが、大人には理解できない」とあるが、それはどうしてか。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

ア 大人は、対人関係などのさまざまな問題を抱えており、子供が疑問に思う部分について考える余裕がないから。
イ 大人は、考えても答えが出ないときのむなしさを味わううちに、いつしか問い続けることに慣れてしまったから。
ウ 大人は、子どもが疑問を抱く世の中の前提となる部分について、考えても仕方がないと思うようになったから。
エ 大人は、世の中で通用している考え方に反抗するよりは、世間の考え方に従って生きた方が楽だと考えるから。

問十 本文中には〈子ども〉とあるが、ここで筆者が〈 〉をつけているのはどうしてか。自分で考えて説明しなさい。

二

次の文章は、芥川龍之介が大正九年に発表した小説「お律と子等と」の一部で、学生の洋一が重い病気の母親お律を自分の部屋で心配している場面と、地方の学校にいる兄の慎太郎がもどってくる場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

机の前には格子窓がある、——その窓から外を見ると、向うの玩具問屋の前に、半天着の男が自転車のタイヤへ、ポンプの空気を押しこんでいた。何だかそれが洋一には、氣忙しそうな気がして不快だった。といってまた下へ下りて行くのも、やはり気が進まなかった。彼はとうとう机の下で漢和辞書を枕にしながら、ごろりと畳に寝ころんでしまった。

すると彼の心には、この春以来顔を見ない、彼には父が違っている、兄の事が浮んで来た。彼には父が違っている、——しかしそのために洋一は、一度でも兄に対する情が、世間普通の兄弟に変わっていると思った事はなかった。いや、母が兄をつれて再縁したという事さえ、彼が知ようになったのは、割合に新しい事だった。ただ父が違っているといえ、彼にはかなりはつきりと、
① こんな思い出が残っている。

それはまだ兄や彼が、小学校にいる時分だった。洋一はある日慎太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から冷静な兄は、彼がいくらいきり立っても、ほとんど語気さえも荒立てなかった。が、時々蔑むようにじろじろ彼の顔を見ながら、一々彼をきめつけていった。洋一はとうとうかっとなつて、そこにあったトランプを掴むが早い、いきなり兄の顔へ叩きつけた。トランプは兄の横顔に中つて、一面にあたりへ散乱した。——と思うと兄の手が、ぴしゃりと彼の頬を撲った。
「生意気な事をするな。」

そういう兄の声の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、遙に体も大きかった。しかし彼は兄よりもがむしやかな所に強味があった。二人はしばらく獣のように、撲ったり撲られたりし合っていた。
その騒ぎを聞いた母は、慌ててその座敷へはいって来た。

「何をするんです？ お前たちは。」

母の声を聞くか聞かない内に、洋一はもう泣き出してた。が、兄は眼を伏せたまま、むつつり佇んでいるだけだった。

「慎太郎。お前は兄さんじゃないか？ 弟を相手に喧嘩なんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にこう叱られると、兄はさすがに震え声だったが、それでも突かかるように返事をした。

「洋一が悪いんです。さきに僕の顔へトランプを叩きつけたんだもの。」

「嘘つき。兄さんがさきに撲ったんだい。」

洋一は一生懸命に泣き声で兄に反対した。

「ずるをしたのも兄さんだ。」

「何。」

兄はまた擬勢を見せて、一足彼の方へ進もうとした。

「それだから喧嘩になるんじゃないか？ 一体お前が年嵩な癖に勘弁してやらないのが悪いんです。」

母は洋一をかばいながら、小突くように兄を引き離れた。すると兄の眼の色が、急に無気味なほど (a) 険しくなった。

「好いやい。」

兄はそういうより早く、氣違ひのように母を撲とうとした。が、その手がまだ振り下されない内に、洋一よりも大声に泣き出してしまった。

母がその時どんな顔をしていたか、それは洋一の記憶になかった。しかし兄の口惜しそうな眼つきは、今でもまざまざと見えるような気がする。兄はただ母に叱られたのが、癪癪に障っただけでも知れない。もう一步臆測をたくましくするのは、⁽²⁾ 善くない事だという心もある。が、兄が地方へ行って以来、ふとあの眼つきを思い出すと、洋一は兄の見ている母が、どうも彼の見ている母とは、違つていそうに思われるのだった。しかもそういう気がしだしたのは、もう一つ別な記憶もある。

三年前の九月、兄が地方の高等学校へ、明日立とうという前日だった。洋一は兄と買物をしに、わざわざ銀座まで出かけて行っ

た。

「当分大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町の角へ出ると、半ば独り言のようにこういった。

「だから一高へはいりゃ好いのに。」

「一高へなんぞちつともはいりたくはない。」

「負惜しみばかりいつていらあ。田舎へ行けば不便だぜ。アイスクリームはなし、活動写真はなし、——」

洋一は顔を汗ばませながら、まだ冗談のような調子で話し続けた。

「それから誰か病氣になつても、急には帰つて来られないし、——」

「そんな事は当り前だ。」

「じゃお母さんでも死んだら、どうする？」

歩道の端を歩いていた兄は、彼の言葉に答える前に、⁽³⁾ 手を伸ばして柳の葉をむしった。

「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」

「嘘つき。」

洋一は少し興奮していった。

「悲しくなかつたら、どうかしていらあ。」

「嘘じゃない。」

兄の声には意外なくらい、感情のこもった調子があった。

「お前はいつでも小説なんぞ読んでいるじゃないか？ それなら、僕のような人間のある事も、すぐに理解出来そうなんだ。——可笑しな奴だな。」

洋一は内心ぎよつとした。と同時にあの眼つきが、——母を撲とうとした兄の眼つきが、はっきり記憶に浮ぶのを感じた。が、そつと兄の容子を見ると、兄は遠くへ眼をやりながら、何事もないように歩いていた。そんな事を考えると、兄がすぐに帰つて来るかどうか、いよいよ怪しい心もちがする。殊に試験でも始まっていれば、二日や三日遅れる事は、何とも思っていないかも知れない。

(中略)

人通りも疎な往来には、ちよつと今一台の人力車が、大通りをこちらへ切れようとしている。——その楯棒の先へ立つが早い、彼は両手を挙げないばかりに、車上の青年へ声をかけた。

「兄さん！」

車夫は体を後に反らせて、(b) 際どく車の走りを止めた。車の上には慎太郎が、高等学校の夏服に白い筋の制帽をかぶったまま、膝に挟んだトランクを骨太な両手に抑えていた。

「やあ。」

兄は A 一つ動かさずに、洋一の顔を見下した。

「お母さんはどうした？」

洋一は兄を見上ながら、体中の血が生き生きと、急に両頬へ上るのを感じた。

「この二三日悪くつてね。——十二指腸の潰瘍なんだそうだ。」

「そうか。そりゃ——」

慎太郎はやはり冷然と、それ以上何もいわなかった。が、その母譲りの眼の中には、洋一が予期していなかった、とはいえ ④ 無

意識に求めていたある表情が閃いていた。洋一は兄の表情に ⑤ 愉快な当惑を感じながら、口早に切れ切れない言葉を続けた。

「今日は一番苦しうだけれど、——でも兄さんが帰つて来て好かつた。——まあ早く行くと好いや。」

車夫は慎太郎の (c) 合図といつしよに、また勢いよく走り始めた。慎太郎はその時まざまざと、今朝上りの三等客車に腰を落着けた彼自身が、頭のどこかに映るような気がした。それは隣に腰をかけた、血色の好い田舎娘の肩を肩に感じながら、母の死

B に会うよりは、むしろ死んだ後に行った方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひ耽っている彼だった。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へほんやり落している彼だった。

「兄さん。試験はまだ始まらなかった？」

慎太郎は体を斜にして、驚いた視線を声の方へ投げた。するとそこには洋一が、板草履を土に鳴らしながら、車とすれすれに走っていた。

「明日からだ。お前は、——あすこにお前は何をしていたんだ？」

「今日は谷村博士が来るんでね、あんまり来ようが遅いから、立って待っていたんだけど、——」

洋一はこう答えながら、かすかに息をはずませていた。⑥ 慎太郎は弟をいたわりたかつた。が、その心もち口を出ると、いつか平凡な言葉に変わっていた。

「よつぽど待ったかい？」

「十分も待ったかしら？」

「誰かあすこに店の者がいたようじゃないか？——おい、そこだ。」

車夫は五六歩行き過ぎてから、大廻しに楯棒を店の前へ下した。C 慎太郎にもなつかしい、分厚な硝子戸の立った店の前へ。

(注1) 半天着……半纏。羽織に似た着物。職人がよく着る。

(注2) 擬勢……見せかけだけの勢い。

(注3) 臆測……根拠もなくいいかげんに推し量ること。

(注4) 大時計……銀座四丁目にある大時計。

(注5) 一高……旧制第一高等学校のこと。

(注6) 活動写真……映画のこと。

(注7) 車夫……人力車をひく人。

(注8) レクラム版のゲエテの詩集……ドイツの有名なレクラム出版社発行の文庫本。ゲエテはドイツの詩人・作家。

(注9) 谷村博士……作中に登場する医者。

問一 (a) (c) の漢字をひらがなに直しなさい。

問二 《『漢和辞書』》について書かれた次の文章の [] に当てはまる語を、X・Y・Z は漢字一字で、①と②はひらがな三字で答えなさい。(XとYには漢数字が入る)

漢和辞書は漢字の辞書である。字の引き方は全体の画数による総画索引、音読や訓読による音訓索引、部首索引などがある。例えば、「庭」という漢字は、「テイ」「にわ」といった音読や訓読で引くか、全体の画数の [X] 画で引くか、部首の「[①]」の部を引いて [②] (部首以外の部分) が [Y] 画の字を探すと見つけることができる。「庭」は、最近、「俺」「岡」などが新たに入れられることが検討されて話題になった、[Z] 用漢字の一字である。[Z] 用漢字は一般社会でよく用いられる漢字の目安として掲げられた漢字で、漢和辞書ではふつう赤字で書かれるなどの目印がつけられている。

問三 [A]・[B] に入る、最も適当なものを選びなさい。

A 指 イ 目 ウ 鼻 エ 顔 オ 眉

問四 [C] に入る、ひらがな四字の語を、「慎太郎」の心情をふまえて本文から書き抜きなさい。

問五 — ①「こんな思い出」の内容は、ここから、どの段落まで書かれているか。その最後の段落の、終わりの五字を書き抜きなさい。

問六 — ②「善くない事」と、どうして感じたのか。その説明として、適当でないものを選びなさい。

A 再婚した母親に対して暗い感情をいだき、さびしさを感じている存在として兄を見ることになるから。
イ 小さな争いごとに過ぎないのに、そこに母親に対する兄の憎しみを読みとるのは大げさなことだから。
ウ 自分のよくない行いのせいで起こった争いなのに、兄にばかり責任をおわせることになってしまうから。
エ 兄のいらだちや怒りが、複雑な血縁のためだとすれば、より大きな家族の問題として感じられるから。

問七 — ③「手を伸ばして柳の葉をむしった」という行動は、何を表しているか。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

ア 母親に対する自分の複雑な気持ちに、あらためて思いをめぐらせている兄の心情を動作で表している。

イ 弟との会話にぎこちないものを感じてしまい、どうしていいかわからない兄の困惑を風景で表している。

ウ 互いに相手を思いやりながらも、父親が違ふという関係を意識してしまう二人の姿を柳の葉で表している。

エ 素直に愛情を表せない自分の意固地さにいらだつ兄の、さびしさの深さをさりげない行為で表している。

問八 — ④「無意識に求めているある表情」とは、どのような表情か。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

ア 肉親に対して少しも感情を動かさず、ひたむきに自分の生き方をつらぬく、かたくなな表情。

イ いさかいの絶えない家族の中で、傷つきながらも肉親とのきずなを求めようとする切ない表情。

ウ 父親の違ふ弟の自分をきらうようできて、実は誰よりも心配し守ってくれる優しさに満ちた表情。

エ 母親にたいしてひややかなばかりに見えて、心配し体調を気づかう隠れた気持ちが見える表情。

問九 — ⑤「愉快的当惑」とは、どのような気持ちか。その説明として、最も適当なものを選びなさい。

ア 母親に冷徹なはずの兄に、その体を気づかう心があることに驚きつつ、家族としてそのことをうれしく感じている気持ち。

イ ひさしぶりに会った兄が以前とは異なり、冷静さの中に人間らしい心を取り戻しつつあることにとまどい、興奮する気持ち。

ウ 母親の体調が悪いというのにわざわざ遅れて帰ってきた兄を薄情であると思いつつも、久しぶりにあえた喜びを感じてしまう気持ち。

エ 兄にも母親を家族として愛する気持ちがあることが感じられ、自分だけが背負っていた不安や孤独から解放されたような気持ち。

問十 — ⑥「慎太郎は弟をいたわったかった。が、その心もちは口を出ると、いつか平凡な言葉に変わっていた」とあるが、それはどうしてか。説明しなさい。